

## 「死をめぐる50章」より

10/19/2015

北村社会福祉士事務所

代表 北村弘之

今年の本の購読では「死」に関するものが多く、今回ご紹介する本は、1998年に初版された朝日選書の一冊です。この本は週刊朝日が'97~98年に連載したもので有名人が「死」に関するエピソードを書いたものです。父母の死を通して思ってきたこと、また死でなく「生きる」ことに関して思ったことなどいろいろです。今回は、その50編の中から六編を書きだしてみました。下記は抜粋です。

### 老害をまき散らしたくない 大橋巨泉(1934年生 テレビタレント)

永遠に生きられるのなら長寿もよかろう。しかし、死は不可避なのだから、ただ長生きしても意味は無い。(中略)父の言葉で決心がついた。(補足:父は、「元気があって、面白くも何ともないや。どこへも行けないし、ただ生きているだけだよ」と晩年の車椅子生活時に息子巨泉に話した) 1990年、56歳ですべてのレギュラー番組を降りて、セミ・リタイア宣言をした。

「古い」とは何かというインタビューを受けた。ボクは漢詩の起承転結の「転」であると答えた。発想した詩を発展させたあと、全く違うことを述べるのが「転」の意味である。人生で言えば、若い頃からやってきたことに終止符を打ち、全く違うことをやってみる、違う生活をしてみることになる。テレビや名声中心の生活から、ゴルフや読書、ボランティアなどに中心が移ったが、毎日が充実している。サラリーマンをやめて、陶芸や園芸をするのも悪くないと思う。但し、もう若くないのだから、冒険や投機はやめたほうがよい。若いうちはあくまで「運」だが、歳をとってからは「愚」になる。

問題は「結」である。漢詩と違って、いつどんな形で完結するのか解らない。明日かも知れないし、二十年先かも知れない。だからいつ「結んでも」よいように、毎日平静な気持ちで生きたいと思う。

いつまでも権力や名声に執着して「老害」まき散らしている人を政財界に見かけるが、ああした生き方だけはしたくない。ただ目標だけはいつも持っていたい。

### ドーンと花火葬も悪くない 玉村豊男(1945年生 エッセイスト)

やりたいことがある限り、人はなんとか生き延びるものである。設定した目標を達成したり、ライフワークを完成したりすると、虚脱感からポックリいくなことがある。だから、私はなるべく目標を持たず、仕事はやりかけを少し残すようにしている。

### “かぎりなく他殺に近い自殺” 香山リカ(1960年生 精神科医)

精神医学の教科書にも、うつ状態からの回復期の自殺に注意するように記されているのだが、長く続いたうつ症状に軽快の兆しが見えると、つい周りの人も「よかった」と思いたくなる。知識としては、「偽りの快晴」のことをよく知っていても、「いや、これはほんものの快晴に違いない」と思い込んでしまうのだ。そしてまわりの人がみな「よかった」と一息ついて本人への注意が一瞬おろそかになったときに、自殺はおきてしまう。

本人にしても、つらいうつ状態が取れてきて心情的には「よかった」と思っているのかもしれない。それなのに作動を始めたプログラムは停止せず、ついには彼を殺してしまうのである。---そう、それは「自分に自分を殺された」としか言いようのないくらい”かぎりなく他殺に近い自殺”である。

### 周辺に旅立つ人がつづいて・・・ 森 英恵(1926年生 デザイナー)

私の仕事は洋服のデザインばかりでなく、暮らし全般を対象にするようになった。生活の役に立ち、周辺を豊かに楽しくできればと願っているが、私も自分の人生について考える。生まれてきた以上、みんな死ぬわけだから、できるだけ納得のいくように生きていきたい。どんなふうになるか、自分の人生は自分の手でデザインしたいと願う。

永い年月にたまったしまった、整理していない自分史ともいえる写真が山のようにある。読みたい本、これも山のように積んでいる。親しい友人とくつろいでゆっくり語り合う時間も十分でない。このいつかの山を読み、整理する時間がほしいと思う。でも好奇心とエネルギーがある間は仕事を続けたい。

### 妻との死別の「悲しみ」は深く 倉嶋 厚(1924年生 気象キャスター)

配偶者との死別は、だれにもいつかはあることであり、関係のない人は「ああ、やはりあの人もね・・・」と思うだけの事柄であろう。しかしそれに直面した人の「悲しみ」は深く、その内容もさまざま、その人でなければわからない。「悲しみ」はいつも個別的である。「悲しい時は身一つ」ということわざを、そのような時に生まれてきたものであろうか。

### 死後の世界への探求心旺盛に 桐島洋子(1937年生 ノンフィクション作家)

五十代に入って子育てを終えたところで、私は仕事のエンジンを切った。まだ当分は食べていかなければならないから、すぐ墜落しては困るが、若い頃乗っていたグライダーのように、エンジンなしでも気流に身を任せて当分はゆるゆる飛び続けることができるだろうと思ったのである。上昇志向や競争意識の強い人には不向きだが、幸いそんな方向は卒業したので、エンジンの轟音や過剰なスピードから解放されて、大自然の感触をゆったりと楽しみながら静かに飛行する方がいい。突然の故障や金属疲労で爆発炎上して墜落するような働き盛りの死が周囲に続出するのを見るにつけても、私は穏やかな滑空でほどほどに時を稼いでから、草深い原っぱに音もなくスーッと着地するように力尽きる穏やかな死を迎えたいとつくづく思った。

【参 考】本年私が講読した「死」に関する本

- 病から詩が生まれる(看取り医がみた幸せと悲哀) 著:大井玄(医師)
- 長尾和宏の死の授業 著:長尾和宏(医師)
- 「老年症候群」の診察室(超高齢社会を生きる) 著:大蔵 暢(医師)
- 死の体験授業 著:山崎 章郎(医師)
- 詩と死をむすぶもの 著:谷川俊太郎(詩人)、徳永進(医師)
- 生・老・病・死を考える 15章 著:庄司進一(医師)
- 野の花診療所まえ 著:徳永 進(医師)
- 老いるもよし 著:徳永 進(医師)
- 生と死を支える(ホスピス・ケアの実践) 著:柏木哲夫(医師)

以上